

第13回 世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの報告

「子どもの読書離れをくい止めよう」

平成31年2月16日(土)

於：教育センター ぎんが

世田谷区立中央図書館

第13回世田谷区子ども読書活動推進フォーラム

「子どもの読書離れをくい止めよう」

「世田谷区子ども読書活動推進フォーラム」は、日頃から子どもたちの読書活動推進に取り組まれている方や関心のある方などに参加していただき、子どもの本の魅力を再認識し、子どもの読書環境づくりにいっそうの理解を深めていただくことを目的としています。

第13回目は、40年以上問題視され続けている、子どもの読書離れについて話し合いました。

当日参加することができなかつた方にフォーラムの臨場感をお伝えできれば幸いです。今後の子どもの読書活動を推進するための参考資料としてご活用ください。

実施概要

- (1) 実施日時 平成31年2月16日(土) 13時30分～16時30分
- (2) 場 所 教育センター「ぎんが」
- (3) 参加人数 60人
- (4) 内 容
 - 第1部 講演「子どもの読書離れをくい止めよう」
講師：酒井邦嘉氏(東京大学教授)
 - 第2部 区立小学校における取り組み
報告：田代瑞恵(世田谷区立若林小学校教諭)
 - 第3部 質疑応答・意見交換

目次

- 第1部 講演 ...P.2～4
- 第2部 報告 ...P.5～13
- 第3部 質疑応答・意見交換 ...P.14～25
- 事業担当係長挨拶 ...P.26

<第1部 講演《要約》「子どもの読書離れをくい止めよう」>

講師 酒井 邦嘉氏（東京大学教授）

子どもの読書離れについて

結論から言うと、原因は大人にあります。親の読書量や、子どもへの接し方などの環境が大きく変化をしているということが、子ども達が読書に使う時間が短くなっている要因のひとつになっています。

電子書籍と紙の本の違いについて、脳科学の観点から書いてほしいと依頼され『脳を創る読書』（実業之日本社）という本を出しました。人間が外界を見たり聞いたりしてそれを脳で記憶し、自分のものにしていく過程は教育の原点そのものです。

読書を通して「脳を創る」というのは、言葉の意味を補っていく過程でもあります。文字通りのメッセージを吸収するというだけではなく、書いてあるもの以上のことを汲み取ろうとする想像力が引き出され、自然に高められるということがポイントです。そして、読書を通して思索に耽ることによって自分の言葉で「考える力」が自然と身につくので、子どものうちから想像力が高められ、言われなくても自分で勝手に考え空想するようになります。読書というのは、このようにして我々の脳を変化させ成長させるという意味で、非常に大切なきっかけを与えてくれます。

「想像力」と「思考力」による「脳の成長」が脳を創るという意味合いでもあります。ですから読書離れの恐ろしいところは、このように子どもにとって大切なプロセスが、自然に起こらなくなることです。

紙の本と電子書籍の違い

紙の本を読んでいた場合では、ある登場人物が出てくる場面をもう一回読み返そうとしたとき、パラパラッとめくるとすぐに開くことができるものです。これは、ページ数に対応した厚みなど視覚・触覚といった五感に訴える経験によって、位置の手がかりを記憶しようと思わなくても、脳が覚えているためです。

「電子書籍」は検索において利便性があり、文字を簡単に大きくすることもできますが、一方でページ割や装丁などの情報を失うこととなります。しかし、語彙の下位項目の詳細な検索では、電子辞書でのスクロールより紙の辞書の一覧性が勝っています。新聞紙も同様で、大きな紙面を広げた途端に脳が自動的にキーワードを駆使しながら興味のある記事を探してくれます。

情報過多の電子教科書やインターネットは、想像力を奪います。考える前に検索をかけてしまう習慣は極めて危険なことでありますが、今はそれができてしまうのです。子どもの教育上、それはとても深刻な問題です。

また、浜銀総合研究所の調査（2015年）によれば、高校生の半数以上は全く読書しないというデータがあります。一番大きい原因はSNSです。SNSを使う時間に

従って読書をしないという割合が増えています。統計に現れなくとも、「考える時間」は相当削られていることでしょう。電子書籍の効果以上に、インターネット上の記事や SNS の影響は大きいと思われます。

紙の本とインターネットの違い

- ・ **著者名**：ブログ等では、本人の名前を隠している可能性が高く、自分の文章に責任を持てるかどうか違います。
- ・ **審査性**：編集者・校閲者がいるかどうかが大きいです。公的なメディアサイトであれば編集者・校閲者が当然いるわけですが、一人の人が書いて発信出来るということ自体が非常に危ういです。
- ・ **保存性、図書館による公共的保存**：紙は数百年残ります。ところが、電子的なメディアになりますと規格や読取装置が常に変わるので今後も読める保証がありません。
- ・ **デザイン性**：装丁も大事。内容におよんだ質感の紙の選択や帯も全て情報を持っています。

読書習慣は家庭から

保護者がひと月に本を 1 冊も読まない家庭では、そのお子さん（高校生）は、半分以上が全く本を読まないというデータがあります。ですから本を読む習慣は、実は、家庭が決めていることになります。

私は高校生時代、アインシュタイン命の高校生で、伝記や相対論の一般書などを次々と読んでいきました。また、朝永振一郎（ともなが しんいちろう）著作集そして推理小説クリスティや寺田寅彦全集なども読破しました。その後、物理学科に進んだので、その時の体験を思い出しながら、最近本を 2 冊『科学という考え方』（中公新書）・『高校数学でもわかるアインシュタイン』（東京大学出版会）出版しました。

私にとって「読書」というのは、ある意味、鍛錬です。特に学者にとって読書は必須です。まず読みたい本を探すということから入ります。これは、研究も同じで、テーマ設定を決め、必要な文献を収集して勉強し、さらに検討を加えて考えます。ですから、本と出会ったら、手に取り読んで内容を理解するだけでなく、その先を想像して考えます。これが楽しくてたまらないのです。共感するところを楽しんで、あと盲点があったら、見落とした原因を反省します。このようにして、空想にふける、これが新しい想像力を刺激します。

脳 - 心 - 言語の目に見えない関係

言語というのは表面的なもので、音や文字で表せるものが聞いたり見たりできるのに過ぎません。ただその反面、想像の部分は人によって違ってきますから、理解度やその言語から一体何を心が汲み取るのかということは人それぞれ違います。

言語と心をつなぐ芸術

素晴らしい文学作品などを読んで心を豊かにし、脳を豊かに保っていくことによって、その心はその人の言葉に跳ね返ってきます。育ち盛りの子どもは正に脳を創っている最中なので、目に見えない形で心がどう変わったのか、どういう言葉のやりとりをしたとかが蓄積して、その人の一生を決めます。ですから子どもにこそ、このメッセージは大切なのです。

芸術を研究の対象にして作った本が、『芸術を創る脳』（東京大学出版会）です。指揮者の曽我さんや、棋士の羽生さん、マジシャンの前田さん、そして日本画家の千住さんと対談して本を作りました。その対話を通して私が学んだことは、極めていった芸術の至る所は学問のそれと同じであり、何をどのように表現し、心に届くようにするのかという芸術家の思いがよくわかりました。

私の研究の要である「文法」というのは、その人間の創造性を支えている部分で、入出力に対して中立です。今やっている研究は、前頭葉にあるその大切な領域を文法中枢と名付けて研究しています。

脳を創るヒント

独創性の基礎になるのは言語能力です。そこで大人も子どもも読書で脳を鍛える必要があるのです。言語能力（理性）に想像力（感性）を足すことによって思考力（知性）に繋がっていくので、別の言い方で言えば、理性に感性が伴ってはじめて知性が生まれます。

生涯に渡る読書や学習の蓄積が脳を創ることにつながるので、自分の思考の限界を超える読書を続けることが、そのヒントです。

読書の価値は決して「効率」にはありません。長い時間を掛けて自分にあったものを自分に浸透させるということは、当然、時間がかかります。何度も読み込んで頭に沁み込ませるためには、それなりの時間が必要なのです。

（第1部講演終了）

文責：世田谷区立中央図書館 図書館運営係
福田明音

<第2部 区立小学校における取り組み>

講師 田代 瑞恵氏（区立若林小学校教諭）



こんにちは。私、世田谷区立若林小学校から来ました田代瑞恵と申します。若林小学校は世田谷区役所に程近くて、児童数は360名程、松陰神社の近くにありまして、地域特性を生かした教育活動の時に、吉田松陰の残した言葉の朗読というのがあったりします。これ以降、座らせていただきます。

私自身は育ちは東京ではなくて、北海道で生まれ育ちました。小学校時代は。とても田舎だったものですからあまり一般の図書館もなく、学校図書館をきちんと定期的に使ったと言う記憶もあまりないですね。その中で今の学校図書館をみていると、世田谷区が色々なサポートしてくださるし、それから学校図書館にも学校図書館司書がいて色々子供たちの伝承活動ですとか、調べ学習とかをサポートしていますので、すごく恵まれた環境に今の子どもたちはいるなあというふう実感しています。

本日は学校図書館運営に携わってきた経験から、現在の小学校での取り組みや児童の実態等知る限りで恐縮ですが、報告させていただきたいなと思います。内容としては大きく三点についてお話しします。学校図書館の役割、それから若林小学校の取り組みと児童の実態、そして家庭との関わりやこれからの課題について、順にお話させていただきます。

はじめに学校図書館の役割についてお話しします。本校では学校教育計画に学校図書館の充実と活用を位置づけています。学校図書館の経営や運営に関して、学校図書館経営方針、学校図書館運営計画等それぞれ策定しています。

今、学校図書館は大きく2つの役割を担っています。1つは、読書センターとしての機能です。これは学校図書館の根幹として、児童の読書活動や読書指導の場をしっかりと整えています。発達段階に合わせた幅広いジャンルの本を整備して児童が自分で選書し易い環境をつくっています。様々な本との出会いは子どもの心を育て、それから生きる上での指針となってくれていますので、それで読む人のフィルターを通すので、同じ本を読んだとしても、まるで同じ感想を持つということもありません。本を介在して自分固有の考えとか、それから価値観を持って広げることのできる、よりよい読み手の育成を目指しています。

もう一つが学習センター、それから情報センターの機能です。児童の学習活動を支援したり、授業の内容をより豊かにして理解を深めたりします。また、児童や教職員の情報認識に対応したり、児童の情報の収集、選択、それから活用能力を育成したりします。

今の学校図書館には読書を推し進めるだけではなくて、主体的、それから対話的で深い学び、いわゆるアクティブラーニングを効果的に進める基盤としての役割も期待されています。なので、学校図書館は読書の場というだけではなくて、日常的な学習の強化指導に

おいても、学校図書館は積極的に活用されて、児童の学習活動を支援できる場であること、そしてその成果物が蓄積されて次年度に活かされて、その活用法が拡充されることが求められているわけです。そういうわけで、本校でも全教職員と学校図書館司書が、連携を取りながらこの2点、学校図書館に置く読書力の向上と、それから情報活用能力の育成の双方に目を向けて強化に力を入れているところです。特に本校、今年度は「世田谷9年教育の研究開発校」として、読み解く力を育てるための言語活動と、学びをより豊かにする学校図書館の活用ということで、2カ年にわたり研究を続けてきました。積極的な学校図書館の活用を推し進めてきたところです。先程、酒井先生のお話がありました言語能力は独創性の基礎を作っているというお話がありましたが、まさにこれを学校図書館を使ってしっかりと作っていかうと、そういう研究の活動でございました。

続いて本日の本題でありますけれども、若林小学校の図書館の取り組みと、児童の実態についてお話しします。本校では、毎年4月の初めに学校図書館利用のオリエンテーションを実施しています。1年生はもちろんですが、1年生から6年生までの全学年が毎年毎年繰り返すんですけれども、図書館の利用方法についてレクチャーを受けます。学校図書館の正しい使い方を改めて学ぶんですね。借りられる冊数、期間、借り方や返却方法、それから日本十進分類法と書架の配列についてなど、基本的な決まりごと、そして館内マナーについての確認をします。学校図書館では静かに過ごすこと、当たり前なんですけれども、これが一番児童には、実際難しいです。それから本を開いた状態では伏せないこと、それから茶を使うこと。本のページがもし抜けたり破れたりしたときには、学校図書館司書にきちんと届け出ること。そういったことを本の扱い方の細部に至るまでしっかりと指導しています。そして本校ではさらに1人1冊の読書ノートを用意しているので、読書ノートの使い方もあわせて指導します。読書ノートには読んだ本の感想を記録して、自分が6年間で読んできた本を後から振り返ることが出来るようになっています。

また、低・中・高学年それぞれに、『若林小学校おすすめの本』を選定しています。それぞれ20冊ずつ選定していて計60冊。6年間をかけて読んでいくことを目標にしています。優れた名作から親しみやすいものまで、ジャンルは広めに設定しています。たとえば、借りる本をその時に選べず迷っている児童には「おすすめの本どう？」と紹介すると、すんなり借りてくれることもあります。これらのオリエンテーションを受講して、ようやくその年、学校図書館を使えるようになる、使っていいよという許可をすることになります。基本的なことなんですけれども、毎年毎年指導を繰り返すことで、高学年になってなんとなくわかったつもりでいる間違いを正して、図書館利用のマナーをしっかりと定着させていくことを目標にしています。

本校の学校図書館の貸出時間は、中休み・昼休みが基本ですが、各学級、国語の時間の一部も活用して、図書時間も設けています。たとえば、よく本を読む児童は中休みも使い、昼休みも使い、さらに図書の時間も使ってたくさん本を読むわけなんですけれども、外遊びが基本的に好きな児童というのは、休み時間にはなかなか来ませんので、そういった本

が好きではない児童もほぼ半ば強制的に図書館に連れてこられる時間があるということになります。図書の間を利用して貸出、それから返却、自由読書と読書ノートへの記録が行われます。また、学校図書館司書や担任による読み聞かせ、毎学期行われる読書旬間（どくしょじゅんかん）の実施、図書関連のコンクールへの参加等、図書に関連した様々な活動が行われています。たとえば、何かイベントがあれば、それに関連する特設コーナーの設定なども行っています。

先程お話に出ました読書旬間です。本校では各学期に1回、読書旬間を設けてそれぞれ2週間実施しています。日頃の読書活動の延長上ではあるんですけども、意識的そして集中的に読書量を増やして読書習慣の定着に繋げています。読書旬間は目標を持って児童が楽しく取り組めるように色々な施策も取り入れて意欲を引き出しています。こちら『読書ビンゴカード』なのですが、9つのマスの縦横斜めをそろえていきます。マスに指定されているのは、本のテーマでそれぞれ異なっています。たとえば魔女が出る話、それから面白い笑える話、動物が出る話など色々なテーマを設定しています。本を読む前にその本の表紙や題名からこれは面白い笑える話かなと想像して、まず本を選書して、実際に読んだ後で読後に一番近いと思われるマスを埋めていく、二段構えに想像力を働かせるようなビンゴになっています。テーマは広く設定しているので、わりと選んだ本3冊ともどれかには当てはまるようになっていて、あっという間にマスをうめて景品の菓をもらっています。

もう一つ、『世田谷線読書の旅』です。これは若林小学校ならではの、世田谷線に近いのでゆかりのカードなのですが、始発は三軒茶屋駅からスタートして、読んだ本のページ数で次の駅に進んでいくようになっています。これ、駅の一つが50ページですね。読んだ本のページ数で進むんですが、ゆかりの深い松陰神社前駅は最低目標にしています。そこまでは、どの学年も進もうという風になっています。学年ごとに目標駅を決めて、目標駅に到達すると特製の記念切符がもらえます。本物の切符のようですね。読書量の多い高学年児童などはどんどん読んでしまいますので終点の下高井戸駅まで到達して、そうすると終点記念切符を受け取れる仕組みになっています。これはもともと中学年以上になると読書量が段々増えてはくるんですけども、低学年の男子はなかなか図書館には来ないですし、もっと利用してほしいな、親しみをもってほしいなと思って考えて始めたことになります。そうすると、低学年男子を狙ってはいたんですが、わりと中学年高学年の男子もしっかりと楽しんでくれて、さらには、中には先生方まで「おー、今回面白いね」と言ってくれる方もいたりします。

その他にも一定数読書することでもらえる、掲示カードを使って、壁面いっぱい季節の装飾をする、アジサイ読書ですとか雪だるま読書、色々な施策を取り入れています。いずれの場合も目標に到達したら手作りの菓をプレゼントしています。他に全児童が書くお薦めの本の紹介カードもあります。気に入った本のお薦めカードを作って、校内のいたる所に掲示しています。これは心に残った場面の絵や心に残ったセリフ、それから感想を中心

に作成しています。日頃から読書ノートに感想を記録するように習慣づけていますので、だいたいいつも3行くらいしっかり1冊につき感想書こうと言っているんですが、そういった習慣があるのでわりと手際よく作成をすすめてくれています。

本なのですが、次は読書カードを掲示している様子ですね。たくさん掲示すると、見ごたえがあるような感じになっています。何を読むかは児童が自由に選んでいるのですが、学年毎に教員側は一応目標を持っています。低学年ではまず、物語文に親しむことです。絵本から徐々に低学年向けの書籍を薦めていって活字に徐々に慣れ親しませていきます。次に中学年では、多様なジャンルの本に触れる事を目標にしています。世界の名作から人気のシリーズ物まで色々な物語に触れさせて教員からも薦めていきます。物語だけではなくて、他にも科学絵本ですとか工作や調理に関係する本、それから産業や工業を紹介した絵本なども含めて説明的な文章にも親しませていきます。中学年は多読の時期かと思いますので自分が好きなジャンルの本をその中から見つけていくようになります。高学年ではさらに中学年を経て自分に合った本や好みの本というのを把握していくようになります。それをより深く読み込んでいくことを目標にしています。たとえば伝記の物、歴史の物、哲学的な物まで、幅を広げて多様な価値観に感心を深めていくことが望ましいなあと考えております。先程、これも酒井先生がおっしゃっていた高校生のころにアインシュタインの本に、はまっていたとおっしゃっていたんですけども、これを小学校の高学年でも自分の好きなジャンルを見つけて、深く読み込んでいってほしいなあとということを目指しています。私自身はあまり自分が高学年の頃に図書館を使う習慣があまりなかったものですから、これを読み込んだという経験がないんですけども今、現段階、小学校でそれを推し進めているような、そんな環境がうらやましいなという気もします。高校ぐらいで私自身、美術に興味を持ったものですから、その頃にルノアールが大好きになって、ルノアールに関係する美術本ですとか、あと歴史に関するものなど、こちらを読み漁った経験があります。やっぱりこれは好きだなと思ったものはどんどん深く読み込んでいくことで、ある意味、世界を広げていくことができるのかなあという風に感じています。

読書活動の他にも教職員によるおすすめ本の紹介、先程に戻りますけれども右側です。おすすめ本の紹介のカードを掲示したり、地域のボランティアの方による絵本の読み聞かせ、それから、すばなし、詩の朗読なども行っていただいています。

それから、高学年の児童の図書委員会も活躍しています。図書クイズ週間では、絵本クイズをしています。他に低学年への出張紙芝居、それからエプロンシアターなども行っています。本の福袋というののもあって図書委員のおすすめの本が入っていて、開けてみるまで中がわからないように包んであるというものもあります。図書委員のおすすめの本の紹介カードもあって多様な活動をしています。



もうひとつ、この期間はノーメディアウィークと銘打って、テレビやインターネットを減らして読書の時間を増やすように、家庭を巻き込みながら児童に向けて、読む喚起をしています。たとえば、そのノーメディアウィーク中は、テレビ・ゲームは2時間までそれから1時間まで0時間等レベル別に目標を定めて、家庭ごとに目標を決めて取り組ませています。かわりに読書をしたり、家族の会話を増やしたりすることが目的なんですが、家庭からいただく取り組み後の感想には、「おかげで会話が増えた」だとか「読書にすすんで取り組んでいた」という風な一定の効果が得られたような感想をいただくことがたくさんあります。

ノーメディアウィークのお便りを、読書旬間の時期になると配布をするんですけども、お便りを配布した段階で男子児童なんかは「うわーっ来たあ。ノーメディアウィーク、やだー」という子も中にはいるんですけども、でも、それも家庭できちんとこの期間はテレビを減らすとか、ゲームは駄目っていうふうに、しっかり取り組んでくださっているんだなあという風に思いまして、それもあり、一定の効果があるのかなという風に思っています。

このように、読書旬間では全校あげて読書推進に努めています。若林小学校の読書活動のスローガンですが“いつでも手元に読みかけの本を”です。教室でも隙間時間を活用して、いつでも本が読めるように、学校図書館の除籍した本や中央図書館からの団体貸出、それから頒布会でいただいた本などで学級文庫をしっかりと整えています。自宅からも自分の本を持ち込んで良いことにしています。児童の学習机の横には図書バックをいつもかけていて、テストそれから学習課題が早く終わった時、それから給食を食べ終わった時も、さらには始業前、それから中休み・昼休み、たったの5分の隙間時間であっても、いつでもさっと本を出せて読書が出来るようになっていきます。実際に読書をする姿がたくさん見られます。

私の学級の例なんですけれども、児童同士での本の貸し借りをさせています。とっても盛んです。紛失を避けるために、教師の立会いのもと、個人が所有している本を簡単に皆にあらすじを紹介させながら、そして借りたい人がいたら手を挙げます。多数いればジャンケンで決めていくんですけども、これが本当に大人気です。初めは不定期に行っていたのですが、子どもが毎回「今日の図書の時間は、皆の貸し出しはしますか？」と尋ねるので、今では本当に恒例の人気のコーナーになりました。今のところは、必ず1週間ぐらいを目安にして、きちんと元の貸主に返していますので、そういった意味では本の利用マナーも身につけてきているのかなという風に感じます。

続いて、学習情報センターの機能とその実践についてお話しします。各教科の学習の発展・充実を図るため、学校の教育課程に即した図書を選定して、学習に役立てています。学校図書館司書は毎年“学年だより”や教科指導書にも日頃から目を通してきています。教員は授業で図書資料を活用しようとするときに、学校図書館司書に相談・依頼して司書と連携して学習に必要な資料を揃えています。授業の導入には学校図書館司書が、図書資

料を使ってブックトークやアニメーションを実施することもあります。

授業での活用例としては、低学年の学習で教科書の本文に入る前に学校図書館の絵本を使って学習しました。“じゅんじょのことばをみつけよう”というものです。これによって、実際の教材文に入った時に取り組みがとてもスムーズになって、成果を上げることもできました。それから中学年では説明文を使ったオリジナルのアニメーションを行いました。アニメーション、簡単に説明すると、スペイン発祥の読書指導メソッドで、子どもの読む力を引き出して読書の楽しさを伝えるという活動なのですが、クイズのようなものです。6班を作って異なる絵本を1冊ずつ与えました。それを班の仲間で一緒に読んで、読んでいない他の班にもその絵本の内容が伝わるように、5枚の短冊を使ってあらすじを簡単にまとめていきます。最終的には全員でその短冊だけをヒントにして全班の絵本に共通するテーマを見つけていく、といったクイズのような活動になっています。で、このテーマが実は次の教材文のテーマになっているということになります。絵本を読んで、そのテーマについてある程度知識を獲得した状態になっていますので教材文にもスムーズに慣れ親しんでいくことが出来ています。

また、思考ツールの一つの、フィッシュボーン図を使って教材文の文章の構成、「始め・中・終わり」を把握する活動をしました。その後の発展学習で、自分の調べたい事柄を今度は自分で選んだ学校の図書館資料を利用してフィッシュボーン図を使って情報整理するような活動もしました。高学年だと新聞を3紙購読していますので、本校では、中学年から学校図書館において新聞の仕組みや書かせ方等の指導を行っています。新聞に段階的に親しませていって、高学年では新聞を活用して内容を読んでわかったこと、自分が考えたことを区別して書くなど、内容を読み取り、自分の意見に繋げる指導も継続的にしています。

学習情報センターというと少し堅苦しいイメージになるかと思うんですけども、実際には子どもたちにとって、学校図書館は読書をする以外にも情報を得たり知識を得たりする、とても身近なツールになっています。社会科見学なども学びを深めるために、図書資料を活用する絶好のチャンスになっています。5・6年生では世田谷では川場や日光などの、郊外宿泊学習で訪れる地域の気候や産業の特色などを図書資料であらかじめ調べます。より知識を入れてから実際に探検したり話を聞いたりすると、より理解が深まっています。それに現地でさらに疑問に思ったことを最初にあの時調べた本にあったなあという感じで、後日、資料を使って調べることもできます。

3年生の社会科見学後には、絵本を活用しました。世田谷区の特徴を知る区内見学があるんですけども、九品仏浄真寺を訪れました。その際、閻魔大王ですとか、しょうづかばあさん、阿弥陀様、極楽浄土などのお話を住職の方に伺いました。そこで後日、教室で『じごくのそうべえ』（田島征彦・作 童心社）という絵本を読み聞かせて見ました。で、この『じごくのそうべえ』には閻魔大王それから、しょうづかばあさん、阿弥陀様、皆そろって登場しますので、子どもたちも大喜びでした。絵本の挿絵を見ながら「あー聞いて

来たとおりだ、しょうづかばあさん、本当に服を剥ぎ取って木にかけてるかけてる」って。あの実体験と絵本の世界が結びついて夢中で話に聞き入る子ども達の姿がありました。

課題を見つけて解決する、問題解決的な学習ですとか、あと、さらに深く調べようとする探求的な学習を通して自分でわからない事を資料を使って調べることができる力、情報活用能力と言っているんですけども、こちらを育てていっています。

また、酒井先生が先程お話されていた紙の一覧性、「一覧性に優れているところがある」というお話があったと思うんですけども、実際に学習活動をしていて、そうだなと感じる部分があります。私も調べ学習をする際には3段階に分けて調べ学習をさせているんですけども、インターネットを使う活用を取り入れているんですが、子ども達にインターネットを使わせると、もうキーワードでしか調べなくなってしまうんですね。なので、まず調べる時は、1段階目、教科書で調べる。たとえば社会科見学なども、世田谷区の副読本で“わたしたちのせたがや”という教科書があるものですから、そちらを使って知りたいことが載っていないか調べる。次にわからない事があれば図書館の資料を使って調べる。最後にどうしてもわからなければ、インターネットでキーワードを使って調べたいことだけをしっかり調べる、という風になっています。そうでないと、たとえばガラスの事を調べようという風になった時に、ガラスを調べると、ただインターネットだとガラスを作っている素材について出てきたりするだけなんですね。そうでなくて、図書館で資料を使って調べると、ガラスの歴史が出てきたり、色々なガラスの種類がでてきたり。あとは国によって作られてきたガラスの美術的な価値ですとか、歴史等がみんなわかるようになっていて、たくさんの事を知る事が出来るようになってきていると思います。ですので、子ども達にはまず、インターネットで調べる前に図書資料を活用しようという風に、学習の中でも薦めていっています。

以上のような機能を有する学校図書館ですが、図書館部では図書関連の行事への参加の働きかけなど、様々に活動しています。読書感想文コンクール、それから読書感想画のコンクール、日本絵本賞読者賞といった色々なコンクールにも全校で取り組み、参加しています。

読書感想文には、アレルギーのある子もやはりいるんですけども、できるだけ表面上の感想ですとか、「こんなふうに私はなりたいと思います」みたいな理想論をつなげるのではなくて、自分の生活経験を活かして書くことを学校では重視しています。

日本絵本賞読者賞コンクールでは24冊の指定されている絵本をすべて読んで、その中からお気に入りの一冊を見つけて感想を書いて投票します。絵本はほとんど読み聞かせして、学校図書館司書、担任は勿論の事、一ヶ月間かけて他学年の担任、それから専科教諭、養護教諭、図書委員会の児童も輪番で読み聞かせをして回っています。読書タイムの当日まで誰が来るかわからないサプライズですね。なので、児童の期待もこういった経験から高まっていくこともあります。

この様な学校図書館で色々な仕掛けをしているので本との関わりを深めていけるように

指導しているのですけれども、やはり読書習慣の形成には学校だけではなくて、家庭との連携が欠かせないなあという風に感じています。

最後に、家庭との関わり、それから、これからの課題についてお話ししたいなあと思います。家庭に向けては、図書だよりの発行や図書館の会報、それから東京都教育委員会が作成したDVDを使った図書ボランティアの講習会なども実施しております。様々な過程を通して読書の大切さを家庭にも啓発していて、幸いにも本校は多くの保護者ボランティアさんにご協力をいただいています。保護者による読書ボランティアは金曜とそれから土曜日、月1回ですが土曜授業の朝に読み聞かせを行っていただいています。使われる絵本には学校図書館の本も活用されていて、入学してから卒業するまで、どの本が読まれてきたかというのをボランティアさんの中で記録を共有しているそうです。記録の物が重ならないようにしっかり配慮されていて、児童が多様な絵本の世界に触れる事が出来ています。

読書支援以外にも、年間を通して本の整理や表紙の整理、季節の装飾をしていただいています。PTAの主催でビブリオバトルも開いているなど、保護者の皆様の意識の高まりも非常に感じているところです。

本校では授業に差し支えない土曜日には、地域の未就学児にも学校図書館を開放しています。三年前から開放を始めたんですけれども、徐々に参加者数を伸ばして、今では多いときで、60名くらいは参加するまでになりました。夏休みには、水泳指導実施日に併せて学校図書館を開放しています。1年生から6年生まで、たくさんの児童が利用して、読書、学習、それから調べ物等で使っています。多年齢の児童と触れ合いながら、落ち着いて読書や宿題をして過ごせる、子どもの居場所の一つとしても機能しているのかなと思います。

また、本校は委託業者と連携して、学校図書館司書が常駐しています。本校学校図書館司書は、本の貸し出し業務だけではなくて、授業や研究会、それから図書委員会の参加等を通して、色々な場面で児童と触れ合って顔を覚えて、それから読書ノートに目を通してきて、児童の読みの実態も把握してくれています。児童は学校図書館司書に、自分が読みたい本があるか検索してもらったり、それから借りる本に悩んで相談したり、感想をどのように書いたら良いかアドバイスを求めたりして、日常的に交流しています。児童はごく自然にレファレンスを活用するようになっていて、どこの図書館でも本のことは何でも司書に相談できるということを知っています。

学校図書館部と委託業者は、毎月の報告会を通して貸出冊数、それから読書傾向、学習支援の実態を共有しています。そして次の月の計画を策定しています。週に一度ほぼ定期的に本を借りる習慣がついてきているんですけれども、委託業者が常駐してからさらに、貸出冊数、それから利用冊数が前年を越えて右肩上がりに伸びてきています。今年度貸出冊数は、一ヶ月に大体2000冊前後で、1人平均5～6冊を毎月借りている計算になります。学校図書館司書の細やかな支援や子どもとの密接な関わりが、学校図書館に足を運びやすくしているようです。

概ね運営については順調なんですけれども、課題がないわけではなく、蔵書点検の度に不明本が、やはり毎年発生しています。マナーと意識の問題で、引き続き児童や家庭に注意喚起が必要になってくるところでもあります。

それから、選書が苦手な児童、やはり一定数います。そのための『おすすめの本リスト』があって、そちらをお薦めしてはいるんですけども、それでも結局じっくりこなくて図書館内をウロウロとしてしまう子が中にはいます。そういう子には「好きな本を持っておいで」と声をかけるんですけども、家には本が無いと子どもが言うんですね。先程も先生がおっしゃっていたんですけども、家に無いわけではないだろうと思っていたんですけど、実際に家にある本が0冊から10冊未満というような話を聞いて、あーそういう環境もあるんだなという風に改めて思いました。自宅で用意してもらった本を持ってくる子ほど、やっぱり学校でも借りた本を熱心に読むし、友達からもどんどん借りて読みたがる傾向があるように思います。

つまり、学校図書館は存在するだけでは十分とは言えなくて、親子で一緒に本を読んだり、それから感想を伝え合ったりして、家庭で本を介在したコミュニケーションを意識的に持っていくことが必要なことなのかなあという風に感じました。まず、大人が学校や家庭でお手本となって、進んで読書をして、その姿を見せていくことが読書離れをくい止めることに繋がるのかなというふうに感じます。

さらに余談なんですけれども、あるとき学校図書館の特設コーナーのテーブルクロスの下からこっそり、とても人気のシリーズの本が見つかりました。おそらくその子は本を借りていて、まだ読みきっていないから次を借りられなくて、でも次に借りるときまでに絶対確保しておきたい。そんな気持ちがあったかと思うんですね。そうしてこっそり隠していたんですけども、これ、あきらかにマナー違反です。また、長期休業明けですね、特に本の返却がひととおり夏休み明けに完了した頃に駆け込んでくる児童がいます。授業の終了のチャイムと同時に駆け込むというのは、明らかに廊下を走ってきたことになるので、これもマナー違反なんです。ま、いずれもあえなく、司書ですとか、学校の担任に見つけて指導を受けるわけなんです。それだけ本が好きなんだなと、本を読みたい気持ちが押さえきれないんだなあという本好きの無邪気な一面と感ずることも出来るので、微笑ましくもあります。

今後の学校図書館には、まず、利用マナーをしっかり守れる健全な図書館利用者を育成しながら、さらに本好きを育てていきたいなあという風に思っております。

以上で報告を終わります。どうもありがとうございました。

(第2部区立小学校における取り組み終了)

<第3部 質疑応答>

質問 :

“速読術”というものは本当に理解できて、心で、頭で感じる事が出来る読書法なのでしょうか。

酒井先生 :

はい、まあノウハウはいろいろあると思うんですけど、自分である程度当たりが付き本であれば、ななめ読みでも器用に拾うだけでも、何を言っているのか、この本を読むべきか、と分かるものなので、それを大きく越えるものではないだろうな、と思います。でも、やっぱり最後までディテールが解らないと読めない本もたくさんありますし、特に自分の今までの既存の知っている分野から飛び出して手を出した本の場合は決して、そういう速読法は出来ないと思うんですよね。だからその時にそういうノウハウがあったとしても、多分あまり役に立たない。類書を読んでいる中で、たとえばビジネス書で、ある程度そういうことが頭に入っていれば、相当間の議論をすっ飛ばしても結論に行くし、内容も値もわかると思いますが、それは、まあ、ななめ読みというものが活かすように思えるだけであって、あらゆる読書に通用する方法だとは思えません。それを他の自分から離れた分野や別の仕事に応用するというのは、なかなか応用が利かないと思います。それは、本質的にそれが優れた方法ではないからなんだろうと思います。

たとえば、ななめ読みが出来たからといって、じゃあ楽譜がななめ読み出来るかということ、出来ないですよね。たとえばある指揮者が、僕の友だちだとすると、こんなに分厚いスコアを頭に入れて棒を振るわけですが、自分が知っている、よく慣れているものであれば、1回見てななめ読みでも大体頭に再現できるものですが、現代曲をパンと当てられたら、作曲家が違えば、全然スタイルが違っているので、まずひとつひとつ分析するところから入って行って、それがけて効率良くやったからといって良い音楽が出せるということではないですからね。

ですから、自分にあった方法とか、その人にあった方法をうまく選択して行くという事になります。我々忙しい時代に生きているので、そういう速読とか、脳に直接響くような方法がないのか、ということに手を出しがちになると思うんですが、そこに本質があるかどうかは、人それぞれが決めることだと思います。

質問 :

若林小学校の私立中学校への進学率は何%ですか。ちなみに東京都は18%、松丘小学校は50%と聞いております。子どもの読書離れは、私は経済第一主義などの世界的・社会的な原因があるという風に思います。今日この場に出席しているのは女性が90%以上ではないかということ、私は何となくその事が関係しているかのように思います。

田代先生 :

えー、私から。若林小学校の私立中学校への進学率ということでしたけれども、申し訳ございません、パーセンテージで正確には把握しておりません。ただ、一定数受験をして進学する児童はおりまして、年度によってそれはわりと差があって異なっています。ただ、若林小学校は世田谷区内の他の小学校平

均と比較すると、他よりも若干低めの傾向にあるのかなという感じはしております。

酒井先生：

まあ、大人の原因の背景にはやはり社会があると思うんですね、ご指摘の通りで。だから我々を取り巻く環境やその価値観の差、もちろん電子化の波に晒されたり、インターネット上の情報がこれだけ多くなるということは予測できなかったかも知れませんね。その中で何を選択し、読書の時間をどう確保するのかというのが逆に問われるような、完全に逆転した状態になっているわけなので、逆に読書を確保しようと思わないと流される訳ですよ。その背景にはそういう経済的な問題やネット、それからおそらく近い将来もう来ていると思いますが、AIの問題が発生します。それもまあ最近講演も増えてきたんですけども、AIが入ってきてどんどん我々の暮らしも変わって来ると思われるんですが、一番不味いのは人間が考えなくなることなんですね。面倒くさい事とか責任取らなければいけない事はAIに任せればいい、何らかの答えが出るだろうと、そのうち会社でもこんな難しい会議はやめて、AIに計算させようと、そうすると一応らしき答えを出してくるわけ、今のAIも昔のAIもそうですけれど、問題なのは人間の側に説明してくれないことです。私は将棋が好きなので、ずっとAIに計算させているんですが、自分の計算機で出した答えの方がはるかに自分より強いわけですから、何故その手を選んだのかはすぐには解からない。人間が説明を求めてAIにどうしてこうなんですか、こちらよりどうしてこちらが良いということを貴方は選んだんですか、という答えが返って来ない、そういうものに対して我々の将来を託すのは極めて危険です。だから子どもたちもだんだんAIを使うようになれば、「AIが言ってるもん」みたいな感じでどんどん流されるだけですね。だからよりそのインターネットの次に来るAIの脅威というのは我々の思考や想像力を奪うだろうと思います。今出来ることは、それ以外に人間が考える力を確保することだろうと思います。

それから、おっしゃった中で言えば、世界がそうやって揺れ動いているわけなんだけれど他文化・異文化に対する関心というのは読書を通じて開かれていく事が多いと思うので、それを閉ざすようになってしまったら、やっぱり読書の世界が狭まってしまいます。翻訳や別の言語で書かれたものを読むというようなこともだんだん我々が狭い世界に忙しく生きていくと、目を留めないで自分たちの文化だけを死守するみたいな形になってきます。だから某国の大統領がしきりに壁を作ろうと暴走しているのを冷ややかに見ているとですね、それは実は我々の家庭にとっても起きているかも知れません。自分たちはこれでいい、自分たちの知らない世界は知らなくていい、シャットアウトすることによって読書も同様の狭い世界に閉じこもってしまった結果として影響を、煽りを受ける可能性は充分あると思いますね。だからそういう多様な世界に向けて、ということでしょうかね。

ちょっときっかけがあって『アラビアンナイト』が一体どうやってあれが受容されたのかを調べてみて、英語版を取寄せてみたんです。最初は別に『千夜一夜物語』と言うけれど、千(話)も無かったんですね(笑)。最初すごい短かったんです。でもそれがあれくらい続くと千話くらい無いとダメだろうと後世の人が随分書き加えてしまったらしいですね。でも、そんなのを調べてみると面白いじゃないですか。元々イスラムの話が本当に豊かで、人間のいろんな様々なところを描いている、そういう逸話が子どもたちの話の中にも出てきますよね。「魔法のランプ」とか、これは『ハリー・ポッター』なり、いろんなキャラクターに代わっているかも知れないけれど、世界やその民族や時間を越えて、わりと普遍的な靈的なものとか神様とかそういうことを知るうえでも、さっき閻魔大王の話もあったけれど大人に

なってもそういう違う世界や不思議なものにも興味を持って読むというのはやっぱり読書の世界の面白さのひとつだと思いますね。だから大人がそこで読書を閉じてはいけないと思います。

で、両親が共働きで忙しいのだったら、おじいちゃん・おばあちゃんがいたら、そのお孫さんに、本当にどんどん本を選んで与える。そういう役割を持っているという風に意識的にやっていただければ、また次の世代に繋がって行くので、そのまま読書体験がその次を創る。このように、ひとつひとつ向き合ってやって行くしかないんじゃないかなとそういうことを考えさせられるご意見でした。

質問：

酒井先生の資料に「文法こそ人間の想像性の源泉だ」、この中に「新しい組み合わせを生み出す」とあるが、具体的にどういったことを指しているのですか。また、今日発表された若林小学校の実例は区内の全小学校でやっているわけではないと思います、やった方がよいのではないのでしょうか。また小学校同士でこういうことを共有しているのですか。

酒井先生：

はい、そういうことで、そこら辺は今度出る本をお読みいただきたいんですが（笑）。イヤイヤ全然、あの舌っ足らずだったのは、その意見がありましてね、あそこで言っている文法というのは“普遍文法”といって、チョムスキー（ノーム・チョムスキー）が言い出した普遍的な文法なんです。人間の言語の元になるものです。それからあらゆる言語に共通しています。それから子どもの脳に生得的にあるものと考えます。生得的、先天的と言ってもいいんですが、生まれつきあるものです。そうしないと子どもはあれだけ速い2、3年の時間で言語を獲得することは不可能です。我々が外国語で苦労していることから分かるように、脳というのは特別なことがありまして、脳が出来てくる時に周りにある言語をそのまま自分で丸ごと言語として吸収する能力があるんですね。その時にその言語を吸収するための鑄型としてその脳の最初の状態としてあるのが普遍文法という考え方なんです。その言葉を吸収した後は自分でそれを組み替えて自分の言葉として話せるようになります。それが新しい組み合わせということの意味でもあります。つまりそれぞれのお子さんが自分の言葉で話すんです。皆さん勿論日本語を話すことに関しては日本だと変わらないかも知れませんが、それぞれのお子さんの話し方になります。

それから、自分の心を引き出して話すので、当然自分の脳や心の影響を受けてその人の言葉になります。たとえば読書感想文というのも自分の言葉に変えて書くというところがすごく難しいので、私も感想文をあまりうまく書けたという記憶があまり無いのですけれども、今思ってみると、さっき田代先生のお話にあったように、みんなにこの本良かったよという風に紹介して書け、と言われたら書けるような気がするんですよ。このミステリーは誰が犯人か明かさないけど意外な人なんだよ、とかいうあたりだけでもぐっと書きたいと思うじゃないですか。だから音楽でも、音楽鑑賞でクラシックを聴くたびに何か感想を書きなさいと言われて何を書いていいかわからないわけね。で、宿題が出て、家で何か曲を聴いて書きなさいと言われて、レコードの解説記事をなぞって書いているような、何かつまらなかったわけです。それは模倣であって、言葉をそのまま言われた事を鸚鵡返しで書いているので、あまり創作的ではないですよ。ただもしここで、すごい涙が出るくらい感動したら何故だろう、どの部分が凄いなだろう、ベートーベンはその部分を一生懸命書いたんだろう、みたいなことを自分で自分なりに、自分の言葉で、言える様になった時に初めてそれが（音楽とかそういう物が）自分のものになるわけだし

よう。そういう自分の言葉にするということが新しい組み合わせを言葉に出した時点で生んでいるわけですよ。つまり、借り物の言葉ではなくて自分がこう考えてこうこうだから、この部分は自分にとって琴線に触れるというような感動を呼んだんだ、ということ自分の言葉で語れるようになる。それが支えられているのが、文法によってきちんとした言語になっているということではあります。だから、翻訳家はまさにそれをやっているわけで、同じことを言おうとして、でも言葉自体は一回繰り返さないといけないじゃないですか。そうすると、じゃ翻訳家というのは、言っている意味は模倣しているわけだからつまらない仕事かということそんなことは無いんですよ、基本的に翻訳家こそあるいは一つの創作なんです。つまり異文化を紹介した時に一番本当は書きたかったことを書くチャンスなんですよ。翻訳する時に自分で組み替えているわけです。これはこういう風に書かれているけれど、本当はこう言いたかったはず。だからあえてそれをちょっと伏せながらもこの日本語にした時に読者がピンと来るような表現をうまく選ぶにはどうしたら良いんだろうと、そこで本当に考える、それで翻訳家の自分の読書体験で「これを言えば分かってくれるんじゃないか」という形で当てていくわけですね。

たとえば、映画の翻訳、吹き替えとなると、もっと大胆に口に当てていかなければいけないんで、そのままの直訳はまず使えない場合が多いんですけど、そうするとその雰囲気や言いたい場面にぴったりマッチしたものをどうしても自分で補わなければいけません。そこはまさに新しい創造性なんですよ。だから、翻訳というのはそういう意味では、いま英語を習って、英語が身に付けばという感じになっているけれど、英語のものを受容して今度は自分の言葉で置き換えるといったことを小学校の時にね、本当に短い英語の絵本とかでもいいので、これからは英語が小学校に入ってくるのはやむを得ないわけだから英語の絵本とかを入れていただいて、それをどうやって日本語で、読んでない子ども、クラスメイトのみんなに伝えるというのがある意味非常に刺激的なのかも知れません。それは難しいでしょうね。だけどそこを支えているのは実は普遍文法があるんだと思って下さい。それは皆にあるので人間なんで必ず通じ合うんです。その部分ですよ、そこがたぶん一番大事な部分なのでそういうところに繋がって行きます。ありがとうございます。

田代先生：

すいません、続いて若林小学校の取り組みをしているようなことが、区内の小学校で共有されているのかというお話でしたけれども、確かに今日お話ししたのは、若林小学校のものではありますが、これは特段すごく変わったというか突出しているわけではありません。どの小学校でも、それぞれの図書担当の先生方が工夫を重ねているいろいろな取り組みをされていることと思います。それが何で分かるかというと、三つ程ありまして、世田谷小学校研究会というのがあって、その中に学校図書部というのがあります。それは、国語部・算数部・社会部というのと同じように学校図書館部というのがあって、そちらにはやはり同じようにそれぞれの学校で図書館を担当していらっしゃる先生方が集まって研究会を重ねて、先ほど申し上げたような情報活用能力を育成するための授業を行ったり意見を交換したり、それから講師の先生をお招きして講習会を行ったり、活発に活動されています。そういった所にどなたでも参加できるので、いろいろな先生が集まってそれをまた自分の学校に持ち帰って実践してみたり、ということが行われています。

次に2つ目、本校では世田谷9年教育の一環で研究発表を今年行ったんですけども、そういった研究発表もいろいろな学校の先生方に見に来ていただいて、またそれで良いなと思っていただければ、自

分の学校に持ち帰って取り組む事が出来るかなと思います。私自身も他の学校の研究発表を見に行きまして、それを更に工夫を重ねて実施できたといった例がございます。

最後3つ目ですが、委託業者を介して他の学校の取り組みを知ることも出来ます。委託業者が他の学校でこんな取り組みをしている、というのを一覧表にして紹介して下さるので、そういったものを参考にしながら、じゃあもっとこんなことが出来るかなあという風に新しい試みを入れたりすることもあります。

そういったわけで、それぞれの学校がそれぞれの地域・特色に合わせて取り組みをされていると感じています。

質問 :

小学校では色々取り組みをされて本を読むようになっていますが、どうして大学生になったら本を読まないのか、また大学の中ではどういう取り組みをされているのですか。たとえば以前の教養課程などを通じて読書は広がっていたと思いますが、今の大学ではアルバイトなどでネットをやる以外にも時間が無いのではないのかと私は思っています。学校以外の状況と、本を読まなくなった要因があるのかを教えてくださいたいです。

酒井先生 :

はい、あの私が去年行った東北のフォーラムは、読書離れに関しての危機感で大学の人たちが集まったんですけども、多分目立った取り組みというのは無いですね。まず図書館は各大学に必ずあるんですけども、なにかそこで活動したり、話を聞いたことはほとんど無いかなあ…。だから大学としてそういう取り組みというのは希薄ですね。

それから教養課程というのはまだ残っている場所がありまして、私がいるキャンパス、駒場のキャンパスは教養課程をやっている、必ず外国語クラスで分けてその外国語の文献を読むところから、その教養課程を推進している。それから英語だけでは無いという事も含めて、教養課程から重視しています。そういう大学もあるんですけども、それはむしろ少数でほとんどはすぐに、たとえば生物バイオ系に進む学生だったら、「最初から生物学を叩き込むべきだ」みたいな、わりとそういう技術的な発想が先走って、教養はどんどん隅に置かれています。

それから、うちのキャンパスでも冷静に見ると、外国語に対する軋轢があって、あれだけ時間を掛けても結局ものにならないじゃないかと、それよりもちょっと身になることを教えた方が良いのではないかという見えない力を感じますね。

私は言語の研究をやっているという事もあって、それに関しては理系の中でも非常にある意味少数派でありまして(笑)周りを見てみると英語なんかやらなくても良い、例の日本人でノーベル賞を受賞された先生が、日本語でも講演されたし「Sorry, I don't speak English.」ってノーベル賞講演を日本語でされたということからも始まっているように、英語なんかやらなくても良いと、物理学は十分に日本語でも出来るという先生がいたという例がすごく外国語に対する敷居を上げちゃったりしてますね。だから正当化に使われてしまう。ご本人はそういう意識は無かったと思うんですけど、ご本人、益川先生ですけど自伝も書かれていて何故英語が嫌いになったかという、クラスで笑われた事が原因で、お金マナーを、モネーと読んだんですね。アルファベット読みで、そしたら先生が爆笑して、「モネーのか」

みたいな感じで言っちゃって、すごく本人は嫌な思いをして、そのトラウマで「もう英語なんか喋るものか」と思ったというのがきっかけだそうです。

ノーベル賞を取ってもそういう話を書かれるくらいだから、やはり子どもたちにとっては自分の発音が上手く行かなかったとか、皆に笑われたという、そういう小さい体験で英語が嫌いになってしまったケースもあるので、だからそれも含めて英語不要論となってしまったんです。

私もアメリカに住んでいたのでこんな簡単な事が何で伝わらないんだろうとか、同じ人間なのに何でこんなことをしかも同僚なのに分かってくれないのかとかね。普通の英語の中のごく一部でしかないものだけれどうまく伝わらない経験とか、そういういろんな嫌な思いとか伝わらない思いとか、悔しい思いをしながら言語と付き合っていくという体験なんですよ。ですからそういう世界で生々しい体験と本はもっと違うじゃないですか。読書経験というのは、その人の自由で自分でそこに入って行けるので、そういう自分が逃げ込める場であって、そういう中で本に接してたくさんのいろんな考えを持ったお子さん一人ひとりがその読書の世界の中で自分を自分というものを見つけていく過程でもあると思うんですよ。それは外でなかなかうまくいかないお子さんが、本の世界で救われるということはよくあって、その人がそういう葛藤の中から優れた作家になるというケースもやはりあるわけで、そういうことを考えるとですね、やはり大学生にとっても本当に読書は必要なんです。

その時に出た話ですけど、最近大学生は本を読まないだけでなく教科書を買わない。みんな普通に大学入ったら教科書を当然買ってくるだろうと思って、じゃ今教科書を持っている人というと誰も手が挙がらなくて、じゃ次回用意して下さいねと言って、次回来てあの教科書どうですか？と言うと誰も買ってないんですって。そのくらいなんですよ。だからそれも経済効果で、出来るだけ楽してタダで情報をインターネットでゲット出来るので、何故その先生の著書をわざわざ買わなくちゃいけないのかという事すら分かっていないんですよ。大学生は。そこまでなので、そもそも本を自分の知識のために必要性があるということすら感じてない。そのくらいインターネットとかSNSとか知識が簡単にタダで手に入るという事は、教科書すらも破壊しているという事なんです。そのくらい今は時代が変わってしまっているわけです。

それから、さっきお話しした様に、大学生が本を読まない原因はその前の高校生にあります。高校生がそもそも読まなくなっているわけです。高校で本を月に0冊と言う学生がそのまま大学生になって、とたんに読む筈が無いんです。しかも半数を超えているということは一致していますよね。そうすると小学生で頑張っ、て、中学は読むようになるかも知れませんが、ただ、そこでSNSに翻弄されて高校時代にスマホ漬けになれば、間違いなくここで読書が0に途絶えて大学生で0になるんです。だから、その負の連鎖を断ち切るためにはどこかで何かが必要なんです。だから小学校だけではダメ、中学校だけでもダメ、やっぱり高校で何をするか、大学で何をかが問われるでしょうね。ただ大学はすごくそういう風にニュートラルで、ある意味リベラルなところがあって、みんなの本を読もうとか何かそのああいいう読書週間、旬間というんですね。

田代先生：

じゅんは“旬”と書いています。二週間なので。

酒井先生：

あっ！二週間そういうことか。なるほど。というような試みを大学でやったら楽しいですけどね(笑)。

大学というのは不思議な組織で、担任機能をしてないんですよ。一応名ばかりの担任がいるんですけど、その担任がすべきことは何か不祥事が起きた時に出て行って頭を下げることなので(笑) それが無い限りはほとんど名ばかりですねえ。

大学生に本を読ますためには、とにかく...この講義では教科書を読むことが必須であると、指定教科書というものを買わなければそもそも授業が成立しないという風に教師側も教員側も言わないとダメでしょうね。そう、当たり前だったでしょう。でも言わなくても皆買ってくるものなんですよ。今は買わないんですよ。言っても買わないですから。

それと、コピーも出来ちゃうという文化があるんですよ。これは私の世代なんですけども、とにかく本もコピー取っちゃう、ノートもコピー取っちゃうから、コピー出来るという風になった時点でダメです。その前の時代は書写ですから、ものすごく時間が掛かるので全部写したらバカみたいなので、その中で要点だけ書き写そうと思ってそこで勉強になっていたわけ。自分でいろいろ経済的な理由もあって友だちから買えないけど借りて、とにかく要点だけを自分のノートに書こうというのが勉強になっていた。でもコピーは、そういう意味で写真と同じで全く労力(学習)がないわけですよ。それからやっぱり、気軽に写真は撮れるというのも大きいですね。デジカメで撮ればいくらでも撮れちゃうわけですよ。だからコピーの文化それからインターネットでも過剰な情報の文化という事によって出版文化自身が脅かされているという構造的な問題となってるんですよ。それが、当然大学に跳ね返って来ているので、大学人としてはそういうフォーラムを開いたということは確かにありましたけれど、その時に共有した情報の中でも目立った取り組みはないという意味でまずいですね。だからまあ、なんか皆様方でそういうパス、パスというかその方面にパイプをお持ちの方はぜひ働きかけていただいて、何とかしないと大変なことになりますよと。今はそういう時代ですね。

質問：

(自分の子どもの例をあげて)本は自分で読むよりも読んでもらう方が好きな子どもに対して、自分から本を読むように、田代先生であったらどんな声かけをしますか。酒井先生は脳科学的に見ると気にした方が良くと思う部分があれば教えてください。

田代先生：

自分で読むよりも、お家の方に読んでもらいたい。そういうお子さんの話で、どんな声かけをしたら自分で読むようになるか、という事だと思んですけども。あの、読んでもらう、読み聞かせるという事は、まだ小学校でも、高学年の児童でも、教室の中で行っているんですね。で、保護者のボランティアの方に来ていただいて読むこともあれば、担任が読むこともあれば、学校図書館司書が読むこともありまして、読み聞かせをするというのは、頭の中にしっかりと絵でイメージを捉えられて、耳を使って聴くという活動になるので非常に重要なことだと思います。ですので、たとえばお家の方が一緒に来て読み聞かせて欲しいと言われれば、そう言われている間はずっと読み聞かせをしても良いのではないかなあと思うくらいに私は感じてます。で、ある時から自分で読みたいという気持ちが出てくれば自然と読書に向かう子どももいるんですけど、なかなかそれが難しいお子さんも確かに実際はいます。そんな

中で声をかけるのは「この本お薦めだよ」とか「先生もこの本読んでこんな感想を持ったよ」それから「お友だちがこんなことを言っていたよ」「5・6年生もこの本読んだことあるみたいだよ」次から次へと連鎖的に「この本」に関する情報を子どもに与えてあげたりもするんですね。そうすると、ちょっとずつ興味を持ってじゃあ読んでみようかな、なんてことにもなったりします。

それから、これはちょっと卑怯かなと思うんですけども、学校の場合なんですけれども、先程申し上げた何を読んでいいのか分からない、図書館内でウロウロする子どもがいたとして、何を言っても響かない子には「じゃあ一度お家の人に本を買ってもらったら」って、そんなことも言ったりします。教員としては、それは職務を非常に逸脱しているので、お家の方にわざわざ電話して「本買ってあげてください」なんてそんなこと申し上げられないですけども、やっぱり子どもの中には自分の本を学校図書館ではなくて、ちゃんと買ってもらって所有するとそれを非常に大事にして読み始める子もいるんですね。なので「一緒に本屋さんに行ってみたら」とか「お願いしてみたら」とか、本当に卑怯だと思うんですけども、子どもたちを通してそんな風にけしかけてみたりもしています。で、一冊の本を読み終わると、それで自信を持って次の本に広げていくことも出来ると思うので、お家のお母さんに、そういったいろんな本に関する感想をお伝えしてあげたり、あとは一緒に本屋さんで選んであげたりとかそんなことも、有効になるのかなという風に感じます。

酒井先生：

そうですね、今あの、2回くらい前のこのフォーラムで「配慮を要する子どもたちの読書活動」というテーマでやられたようですが、やはり読書というのは実は配慮を要するお子さんもいるということです。

文字を読めない・読みたくないという背景には、失読症とか、いわゆるディスレクシアと言われる病気があります。これはやっぱり脳の病気で、実は先天性・後天性両方あるんですけど、活字を脳が受容するにあたって脳がうまくその文字を捉える事が出来ない、そういう病気が確かにあります。

欧米が凄くその率が高いのは、文字から音に交換するのがアルファベットの場合特に難しいです。英語は読み方が結構複雑で、日本語のようにストレートにかな音から音に換えるというのは難しいわけ、つまり我々も文字を普通に読める方にはなんの意識も無いのかも知れませんが、脳では相当なことをやっていて、脳の特定の文字中枢と言う場所を使って、その文字を音声に変換して読んでいるわけだから、さっき読んでもらっていった場合にはそのまま頭に入るという、だから文字に対する能力というのは実は凄く個人差があるということです。ですから、活字というのは絵文字とよく似ていてそれ自身にはその音も無ければ意味も無いわけで、それを汲み取って初めて成るわけ、だから漢字とかの場合にはもっと具象的な文字ではありますけど、かなり抽象化されていることは確かなので、いろんな読み方が日本語の場合には出来ますよね。一つの漢字であっても、まあ中国語の場合一つしか無いわけですけども、だから音に交換するという時点で脳は相当なエネルギーを費やして実は読んでいます。だから僕たちも本を読む、文章を読む時は文字から入っても頭の中で声に出しているという感じですよ。あれは脳がやっていることで、そこに実は障害とありますが、もどかしさを感じるお子さんもいるでわけです。

まあ、有名どころで言えばトム・クルーズとかがカミングアウトしてますけど、自分はそういう意味で学校で本を全く読めなかった。彼が成長して役者になれた理由は一回音声で誰かに読んでもらって、それを記憶すれば台詞が覚えられる。それで完璧な演技が出来るわけです。でも彼は台本が読めないん

ですよ。それでも俳優という仕事は出来るわけです。

だから私が提案したいのは、『脳を造る読書』の中で書いていることなんですが、朗読CDというのは日本ではあまり流行ってないんだが、凄く大切なんです。だから俳優さんとかが文字をきちんと日本語の音声にされて抑揚を付けて物語を語り、ドラマチックなところを上手く読む。それを出来るだけCDとかDVDでもいいんですけど、そういう音声として残すという努力をもっとやって、それを図書館でも活用出来るというのも、ありかなと。

先程ボランティアの方々とか、親御さんが読んで下さるといっても、目の前に人がいるというのは良いことなんですけれども、いまのお子さんはひとりひとりCDプレーヤーとか皆持っているし、スマホに入れてもいいので、朗読を聴くということも読書に彼らを引き付ける一つの手段かも知れません。

だから「本当にいくら言っても本読まないのよ、うちの子は」と言っても、もしかしたらディスレクシアの可能性だってあるので、そうすると本を読め読めというのはその子にとっては暴力になってしまいますよね。実際出来ないんだから。だからそういう場合でも、実は音を入れたことによって、「本ってこんなに面白かったんだ」という風に気付けるので、そういうオプションを多様に用意してやるっていうことは大事じゃないですかね。本当にすぐれた朗読っていうのはあります、だから脳で音声化するというところを外から助けてやることも出来ます。

最近、NHKの元アナウンサーの方で、山根基世さんの講座をちょっとお手伝いしている関係もあって、読み聞かせの全国的な活動がすごく広がっているということを経験・体感として心強く思っているんですけど、そういうものをCDに残してやっぱり気軽に聴けて図書館でもあの話もう一回ちょっと朗読で聴いてみたい、そういうのがもし出来たら、もしくは学校の先生や国語の先生で読み方が感情がこもって素晴らしいという先生がいらっしゃったら、それを録音させていただいてそれを繰り返し聴くとか、そういうチャンスによって読書はもっと開かれていくので、僕は音声のオプションを増やすとか、あと音声に対しても聴覚障害に問題がある場合には手話に翻訳するとかね、そういうオプションもすごく大切だなあと思っていますね。

結構朗読に関しては、私の本の中にも書いてあるんですが、面白い後日談があって、聞いたことの無いある会社から朗読CDを買いませんかとというダイレクトメールが来てまして(笑)。で、見たらなかなかすごいですよ、『三国志』全部吹き込んでまして、橋爪功さんだったかな、おそらく私だったら買ってくれると思ったのではないかと思ったんですが(笑)高いですよ、あれ全巻読んでも10何万だったかな、ちょっとすぐにはとって、何処行ったか紛れてしまったんですけど。ピンポイントで狙われたんですね、たぶんね(笑)。こういう話しをしている人なので、あの人がいたら『三国志』買ってくれるんじゃないかって。でも、あれやっぱり図書館にいて、コピー出来たら、あんまり良くないけれどね、でも断片的でもちょうど玄德がこう言ったとか、そういうくんだりで良いところだけでも聞かせたら、絶対全体を聞いてみたいと思うんじゃないですか。だから、そういうチャンスを増やせればと思います。だから、お試しCDとかは結構大事じゃないかと思うんですよ。随時音声を入れるということは今の質問で思い至ったんですけど、「読書に音を！」というのは結構大事で、本当にピュアに考えれば文字だけでいいんじゃないですかと皆思っていて、当たり前になっていて、こういう所に集まる皆さんというのは、当然当たり前文字が読めるという、そこを前提にして考えていらっしゃるでしょう。でもやっぱり、もっと多様に考えた時に、何故この子は本が読めないんだろうといった時に、それはちゃんと脳科学的で理由がある場合があるんですよ。それに対して是非想像力を持っていただいて。でもそ

の子も読書は出来るわけですが、音が入ればいいんですから。文字が読めなくたって読書という読書はあるという事を是非考えていただきたいですね。それでさらに盲目だという場合であれば、点字を使った読書も当然出来るわけですから、点字の翻訳もオプションとして付ける必要もありますしね。そうやって多様なお子さんがいるんな個性を含めて持っている中で読書に親しむということ出来る限り間口を広くするということが学校の中でも大切だということで、まあ単に体を動かすことが好きだからという以外に、もしかしたら原因がありうるということが今思い当たったのでお話ししました、ありがとうございます。

質問：

大人も子どもも、本に馴染めないとか読むと眠くなる（笑）と言ったことがおそらく多くの方にあると思いますが、対策はどうしたら良いでしょうか。

酒井先生：

そうですね、まあいかに集中力を高められるかとか、興味を持続させるか、ということなので、ある本が分からなかったら、それに対する解説を読むというのもありでしょう。それから眠くなるというのは決して悪いことでは無いわけですね（笑）。脳だって常に働き続けているわけではないですね。やっぱり眠る前に読んで幸福に夢に誘われるというのも良いことだと思いますから。寝る前の読書というのも結構良いことだと思いますよ。だからまあ、集中して読む場合ともうちょっとこうエンタメと言いますか、趣味として読むような読書というか、もう少し肩のこらない吸収の仕方もあると思いますし。

それから今の忙しい時代で決定的に欠けていることを、さっきと連ねて考えると、ラジオの利用なんですよ。ラジオというのは、映像があって当たり前という世界にとって見ると、逆にラジオの番組を聴くというのは新鮮に思えるかもしれません。特に今のお子さんの世代だとラジオってあまり聞かないんじゃないですか。ただ、ラジオほど想像力がある意味鍛えるといえますか、さっきの朗読の延長で行きますとラジオというのも、なかなか良いメディアなんですよ。だからラジオを聞かせるのも、面白いかも知れません。特にラジオで朗読とか、あとはその要するに劇としてのパフォーマンスを複数の朗読者といえますか、声優さんで、寸劇をやったりとかそういうのは昔は結構ありましたね。

僕は、学生時代は大体はFMとか聞いていて、あの『刑事コロンボ』で声をやっていた、有名な小池朝雄さんが毎晩深夜ギリギリにやる、『音の本棚』というのがあるんですが、それをチョット聞くだけで相当読書した気になりましたね。ああいう世界は今あんまり無いですけど、でもやっぱりラジオは相当力を入れてやっていますし、私もラジオに何回か出たことがありますけれども、すごく難しいです。はい、つまり顔が見えていればある程度言い淀んだり、何とか察してくれるので、あんまり違和感はないんだけど、音だけの世界になるとこら辺の関節がピキッと鳴っただけで「あっ先生、今の止めて下さい」みたいにストップが入るんですよ。やはり緊張しますし、その時にキチッと話すべきことを集中して話す、そうすると聞く方も真剣に、聞くときに聞かないと、となるわけですね。話をして所謂ワイドショーみたいな型で笑い飛ばして流れるものではないので、この人が何を、どういうメッセージを、言ったのかという事をちゃんと聞いて理解しているな、となるでしょ、だからやっぱり、ラジオをもう少し入れてみたりすると、読書に通じるところが多いかなと。

つまり我々はあまりに情報が多いからどうしても流されて結局上澄みだけをすくっているところが結

構があるので、あえて情報、視覚的な情報を無くして見るとか、文字が無いんだけど音声があるだけにしておくとかいう世界があった時に、その世界をどう自分で把握するかというところが試されて結構楽しいんだろうけど。まして優れた人だと、もう一人何役でも声を変えて、喋れますからね。それはすごいです、だから俳優さんも、その場面でパッとスイッチしてそのひとりひとりの登場人物に合わせて声を変えるんですね。これは、もう欧米では一人で読むという小説の読み方は定番になっていて、私の本の中で紹介したのは、『オリエント急行』の事件のストーリーを全部、ポワロ役で有名なデヴィット・スーシェが読んだやつがあるんですけど、あの乗客のたとえばロシア公爵のロシア語訛りの英語っていうのもそのまま喋るんですよ。喋っただけですよ。音のトーンも変えて女性が喋っている風にして、ロシア語訛りの × という感じで英語を喋るんですよ。それでまた素に戻ってト書きの地の部分を読むんですね。もう人間国宝みたいな感じです（笑）。あれを聞いた時にはこれはすごい技だなと思って。だからね、小説を読む以上になんかリッチな音の豊饒な世界に奪われるわけ。だからやっぱり読書が好きな人というのは、それが自分の中で、脳の中で創れる人なんですよ。それが出来ない子どもたちは、ずっと音の世界から読んでもらって、凄い分かった。だから次は活字だけでも分かるという次の段階になるんで。最初からやっぱり文字だけを読みましよう、というような訓練ではないので、音の世界やいろんな多様なチャンネルからやっていくうえでは、あえてTVではなくラジオという選択肢もあります。語学もむしろラジオの方で講座を聞いてみるとか、けしてラジオがクラシカルになったという感じはしないですね。

質問：

区立図書館と小学校でおはなし会のボランティアをしています。酒井先生の、音を介しての読書というお話が、私たちおはなし会をしている者たちの願いです。（おはなし会で）子どもたちや保護者の方たちに本を薦めるという様な活動もしています。その普及のためにも、おはなし会を活用して小学校でもストーリーテリングをお勉強している方たちをもっと活用していただく場所があればいいなと思います。

田代先生：

はい、本校では保護者の方のボランティア以外にも地域のボランティアの方に来ていただいています。毎年、春と秋の読書旬間の時に、年に2回、一回の読書旬間に5回、なので年間通して10回ほど読み聞かせに来てくださっています。今ストーリーテリングと仰ってましたけれどもその方の読み方は、全く絵本などを使わないすばなしをしたうえで、こんな本がありましたと紹介したり、あとは歌遊びも合わせて、お話と絡めて紹介していくといったようなこともやって下さっています。

ですので、機会があれば是非本校でもそういった方々にご来校いただいて、是非子どもたちに読書の楽しさを伝えていただきたいなと思うんですけども。逆に学校もどうやってそういう方たちにお話ししたらいいか分からないというか、そのツテが無いんですね。なのでそういったネットワークが出来たらなあというふうにも思いますし、もし近くの学校でやって下さるといふことであれば、学校ごとに学校協議会ですとか、運営委員会といった地域と学校を結ぶ組織もあるので、そういったところにお話を下されば受入体制もあるのじゃないかなあという風に感じます。

今のところ、主に朝の読み聞かせに来てくださっているのは、保護者のボランティアの方なんですけ

れども、保護者のボランティアの方はどんどん次の世代の方にお話の仕方だとか、本の選び方というのを伝えてくださっているので、本当にいろいろな本、子どもたちの楽しめる本を持って来てくださっているという風を感じています。ありがとうございます。

(第3部質疑応答終了)

< 閉会挨拶 >

中央図書館事業担当の渡邊です。今日は多くの方に来ていただいて、本当にありがたいです。館長が所用がありまして、かわりにご挨拶と、学校の取り組みをお話ししていただいたので、図書館のことも簡単にですが、お話しさせていただきます。

図書館もやはり、中高生の利用が少なく、いま一生懸命努力しているところなんですけれども、図書館で特にいま力を入れているのは、最初が肝心なのではないかと思い、乳幼児サービス、赤ちゃんからおはなし会、お薦めする赤ちゃん絵本を紹介したブックリストの配布などを行っております。また、乳児の3・4ヶ月健診というのがあって、そこは3・4ヶ月の赤ちゃんが90何%は、受診することなので、そこで「しゅっぱつしんこう」という赤ちゃん絵本のリストや、「0才から図書館利用出来ます」ということで利用案内も一緒に配付したりとか、諸々の活動に取り組んでいます。赤ちゃんおはなし会は、昨年度は全館合わせてのべ400回実施、参加人数はのべ約5000人の参加がありました。

中高生くらいからは忙しくて本からちょっと離れてしまっても、小さいうちに読書の習慣がしみ着いていれば、どこかで戻って来てくれるのではないかとということで今のところ中高生へのサービスも頑張っているんですが、どの館も赤ちゃん向けサービスに特に力を入れてやっています。

あと、先程酒井先生が「読書は家庭から」というお話がありましたが、世田谷区も10年ちょっと前に、毎月23日を「世田谷家庭読書の日」と決めましている事業をやっています。去年までは標語を募集して、葉・ポスターを作成していたのですが、今年度は、家庭で一緒に親子で書いてもらえると良いかなと思って、「読書ノート」というのを作って皆さんにお配りしています。

あと、小学校・保育園にも、図書館から出て行って、出張おはなし会を行ったり、図書館外のイベントでも、おはなし会をやったりしています。ボランティアの方もその時は一緒に来ていただくこともあります。

読書離れをくい止めよう、ということで図書館もちょっと頑張っているということをアピールしようかなと思い、最後出て参りました。本当に今日は酒井先生と田代先生の貴重なお話ありがとうございました。最後に多大なる拍手を。

(拍手)

第13回世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの報告

発行 世田谷区立中央図書館
〒154-0016
東京都世田谷区弦巻3-16-8
電話 03-3429-1811
FAX 03-3429-7436
発行月日 令和元年6月
広報印刷物登録番号 1747